新出墓誌に見られる初期禅の両都における伝播についての考察

―特に洛陽を中心に―

蒋海怒

21世紀に入り、中国中世の碑誌資料、特に唐代の墓誌が再び大量に世に現れたことで、唐代の社会文化及び宗教研究に豊富な新文献資料がもたらされた。その中の初期禅に関わる墓誌は、成立時期から見れば、開元初年（713）より大和年間（827-835）まで、特に開元（713-741）・天宝年間（742-756）に最も集中している。発掘地域から見れば、唐代の両都（長安・洛陽）、特に洛陽で発見されたものが最も豊富である。このような碑誌資料の成立時期と発掘地域との関係は、洛陽における初期禅の栄枯盛衰の趨勢に見事に合致する。代表的な先行研究としては伊吹敦教授の「墓誌銘に見る初期の禅宗（上）(2008)」「同（下）(2009)」が挙げられる。ただし、そこで取り扱われた資料は『全唐文補遺（千唐志斎新蔵専輯)』（2006）を下限とする。

それに対して、本発表は2004年より2022年現在までに新たに出版された墓誌を調査対象とした。その中から初期禅に関わる墓誌40篇を選び出し、それらに記録された禅宗史に関する情報を総合的に考察することによって、以下の五つの課題を明らかにしようとするものである。

①神秀以降に登場した数人の唐代の禅師と禅尼の伝記を補正する。また、伝世文献に記録されていない高法輪・法振・法津等の重要な禅師の記録を増補した上で、初期禅の系譜に対する微調整を行う。

②禅宗の唐の両都、特に洛陽における伝播の状況を考察し、洛陽禅に対する認識をさらに深める。

③墓志で顕著に反映される、初期禅の有していた下級官僚及び在家修行に励む女性グループ（マイノリティ）に対する吸引力に基づいて、初期禅の社会伝播の側面、及び影響の深さを探求する。

④「頓悟」に関する墓誌を整理した上で、「頓悟」説と神秀等の北宗禅師との関係を再検討する。

⑤墓誌の「禅宗」または「祖」の用例を整理することにより、初期禅における宗派独立に向けての模索を検討する。

初期禅にかかわる新出墓誌類の文献は、伝世の禅僧伝記・燈史の不足や誤りを補正できるだけでなく、その内容は敦煌禅籍と表裏をなすものである。今後の唐代禅宗史の研究は、この三種類の文献を総合的に考察した上で展開していくだろう。

一、禅師と禅尼

伝世図籍や敦煌写本などと比べ、石刻文献にはかなり多くの初期禅時代の禅師の塔銘の墓誌が含まれている。それらの墓誌に、出自・法系・行履・法臘などの記録が完備されている事実は、墓誌類文献が歴史研究に最適な資料であることを物語る。これらの新出墓誌に記録される情報によって、僧伝や燈史の内容の補正が可能となるのである。

新出『盧正権与妻李氏合祔墓誌』（三秦出版社、2006）と『王大器妻盧氏墓誌』（国家図書館出版社、2018）の両篇を見ると、伝世文献の記録のように神秀が洛陽で公に開法しなかったという主張が否定される。むしろ神秀は公開的な修禅指導を行い、また参加者も多かったという事実が知られるのである。

また、新出墓誌は普寂の影響力の大きさを表している点も注目すべきであろう。まさに本文の付録に見られるように、十二人の修禅者が普寂から啓発を受けていたのである。さらに驚くべきは、墓誌の中に「大照禅師」という単語が高頻度で現れることであり、その数は神秀（4回）・義福（3回）また普寂の弟子の弘正を遥かに超えている。本発表の付録は2004年以降に出版された墓誌を統計対象としており、仮にこれ以前に出版された碑文資料を含めると、普寂という名の出現頻度はさらに高まる。これらの資料によって、普寂が初期禅における布教の第一人者であることが認められよう。また伝統的な禅宗文献に見られるような神秀の弟子としての「（義）福・（普）寂」の対等な位置づけについても見直していかなければならない。同時に、墓誌はまた、伝世文献に記録された、「厳重少言、来者難見其和悦之容」という普寂に対するこれまでのイメージを一新させた。実際には、普寂が「厳重少言」ではなく、頻繁に修禅者たちに開法したことが明らかにされたからである。

そのほか、新出墓誌によって神秀の有力な弟子の一人である降魔蔵についての事蹟も補足することができる。降魔蔵の行化地域については、『宋高僧伝』

巻八「唐兗州東岳降魔蔵師伝」でも、彼が泰山にいる時に「学者臻萃」と記すのみで、ほかの教化地や遷化の場所及び墓塔の所在地にはまったく言及するところがない。しかし、新出『諱仁者墓誌』（中華書局、2004）によると、墓主が亡くなった後に位牌が龍門天竺寺の南にある降魔和上塔院に移されたという。これらの記録によれば､降魔蔵は晩年に洛陽で布教を行っただけではなく、没後、その塔院もまた洛陽の周辺に設けられたことがわかる。

さらに、新出墓誌は完全に歴史の中で忘れ去られてしまった重要な禅師、神秀の弟子の智成と高法輪の事蹟も提供した。『秦晋豫新出墓誌蒐佚三編』(2020)に収録された王屋山逸人清河路啓還撰『大方山香谷寺法輪禅師塔銘並序』は近年、沈国光氏により研究された資料である。当該墓誌によれば、高法輪がかつて神秀より法を学び、大周山での短期間の修禅の後に、求めに応じて大方山香谷寺に住持することになり、智成より続けて法を学び、最後に香谷寺で円寂したことが知られる。智成は神秀の四大弟子「寂・成・福・蔵」の一人の「成」である。また智成が神秀の弟子の中の「入室之首」であるという記録は、諸弟子たちが神秀の示寂後、公認の後継者を求めようとしたことを窺わせる。

最後に、唐代の墓誌の中では、尼僧がよく和尚と呼ばれ、禅尼がよく禅師と称されている点も重要である。更に、新出墓誌の中には数名の禅尼も含まれるが、このうち伝世文献にまったく言及のなかった禅尼らの名は、墓誌の出土と共にはじめて世に知られるようになったのである。

二、両都における禅の相異

伝世仏教文献に基づくと、初期禅宗が栄えたのは則天武后（在690-705）より玄宗（在712-756）の時期までであり、長安と洛陽が対等な位置づけであったという印象を受ける。この時期の禅の歴史については、僧伝、燈史、碑銘にしばしば「両都」または「両京」という言葉が用いられている。また、長安は政治の中心地であったため、当時国際的な大都市となり、学者たちも長安が第一の中心地であったと見なしがちである。しかし、新出の初期禅宗関係の墓誌によって、こうした従来の見方は覆されるべきであろう。初期禅の伝播においては、洛陽の優位性が確認できるからである。さらに発表者は、初期禅とは洛陽禅に他ならないとすら考える。

唐代初期禅の禅師たちの主たる布教の場所は嵩洛地域であった。新出墓誌によれば、神秀は洛陽の天宮寺を中心として開法した。数多くの信者たちがこの

天宮寺で「稽首請益」、つまり神秀に従って禅法を学んでいたことがわかる。

8 世紀頃の初期禅の禅師が、長安ではなく、しばしば洛陽で布教していたということは、その教化の対象、即ち信徒たちも洛陽の周辺に多くいたと推定される。しかしこの推定は、理論上は成立するとはいえ、史実による裏付けが必要となる。発表者はかつて唐代の世族（名家）の夫人の墓誌を主な調査対象とした際、彼女たちの亡くなった場所の大部分が洛陽の里坊（都市区画）であることを発見した。古代中国人には「安土重遷」の伝統があり、臨終の地は往々にして生前長く生活した場所が選ばれる。このほか、現存する洛陽の里坊の史料によれば、彼女たちが居住した里坊は、多数の寺院と住宅、及び佞仏（仏教を盲目的に信じる）の高官の邸宅が混在した地域であり、禅師、高官、世族の夫人たちが緊密な関係を持っていた。最後には、彼女たちの多くも洛陽周辺、ことに洛陽郊外の墓所（北邙）に葬られたのである。

言うまでもなく、その原因はさらに詳細に分析する必要がある。例えば、唐代仏教の諸宗派の発展を研究する際には、その各宗派の地理的な分布の異同を考察した上で行わなければならない。伝世史料から見ると、唯識宗・密宗・華厳宗・浄土宗が主に長安周辺で流布したこととは異なり、禅宗は洛陽を中心として布教し、後にほかの地域に広まった。また、則天武后より玄宗の開元年間の前半期まで国の政治の中心は洛陽が基盤であり、さらに、何代かの皇帝は長安よりも洛陽で長く政を行っていたのである。興味深いことに、玄宗が長安を固定居住地にした後から、初期禅の衰微がはじまっており、こういった唐朝の政治の中心の変遷もまた分析を行う際の要素となる。

三、身分と社会交流

墓主の出自を如実に記載するのが、墓誌の最も基本的な機能である。初期禅に関する新出墓誌の多くが、唐代の中・下級の役人と世族の夫人たちという、二つの修禅に励んでいたグループの活動を記録している。その具体的な活動内容を整理したところ、彼らが行っていた修禅に関連した各種の社会交流の様相を明らかにすることができた。修禅に励んでいた二つのグループに所属するメンバーの身分と社交経歴の考察は、初期禅の社会的側面における展開についての研究に豊富な素材を与えている。

墓誌には、官僚が転任する過程で次第に自分の官としての人生に失望し、世務を捨て禅門に転向したことを記したものも少なくない。また、官職にありな

がら突如退職し、朝晩に修禅生活を送った事例もある。例えば、『龍庭瑋墓誌』には墓主が慶州華池県令に任命された後に、官職を捨て、普寂の門下に入った事例が記される。また、『蒋渤墓誌』には墓主が二十歳で明経科の進士に登第し、一時は過渡的な職にあたる汝陽主簿に任命され、その任期を満了した後に「大学助教」に昇進したが、直ちに任を退き山野に隠居して、最後には禅僧となったことが記録される。

墓誌の中には初期禅に関係する人物が多いが、研究の意義が極めて大きいのが世族の夫人たちである。近年発表者は「墓誌に見られる唐代世族夫人の習禅風潮」というテーマの研究を行った。考察した墓誌銘では、門閥貴族の妻が「夫人」と通称された。そして修禅に励んだ世族の夫人は、主に洛陽と長安地域に集中しており、特殊かつ一時的な歴史的グループを形成している。その背景としては、則天武后の久視年間（700-701）およびその後に神秀、義福、普寂らが王室の尊敬を受けており、彼らの開示した禅法も洛陽・長安に居住する世族の夫人たちを惹きつけたのである。墓誌には、修禅を行った在俗の夫人たちの多くが開元・天保年間に病没したことが書き記されている。玄宗朝のあと、こうした墓誌の記載は急激に減少するが、その理由を考えてみると、世族自体の衰退が関係していることは勿論であるが、それと同時に禅そのものの発展地域や支持層の変化が関係していたことが挙げられよう。中唐以降、河洛・関中地域では、禅は帝室の強力な支援を得ることができなくなり、馬祖道一と石頭希遷の系統が江西や湖南で行った布教活動は主に社会的下層階級に向けてのものであった。世族の夫人が修禅に励むという風潮は、歴史的な挿話の一つであったと見なしうるのである。

出家者の入寺修行および諸寺院を往来する修行は、よく見られる交流の方法であり、僧団の内部に見られるものではあるものの、簡単な説明が必要であろう。在家信者たちの間には「小型交流」というべきものがよく現れ、形式としては参拝･請益及び諸寺院への巡礼･求道がある。当然ながら、このような「小型交流」が盛んになれば、往々にして法侶共修に陥りやすい。また家庭内部または家族の間にある仏教修行に関する交流も、禅を中心とする社会交流の重要な形である。数多くの墓誌で、仏教及び修禅に好感を持つ家庭が、彼らの順調な禅の学びと交流の助けになったことが記されている。さらに、二次的な禅交流の仕方もある。例えば、墓誌の撰述である。唐代には仏教関係の墓誌を撰述した名士が複数おり、また彼ら自身も仏教を信仰していた。唐代初期では張説･

厳挺之･李邕、後期では白居易、劉禹錫などがその代表である。新出墓誌でも、類似の状況が見られる。一つは、習禅経験のあった自分の家族のために墓誌を撰述することである。例えば、夫が妻のため、あるいは子が母のために、墓誌を撰述した。もう一つは、習禅仲間からの依頼である。例えば、杜昱の撰した『未曾有功徳塔銘』（国家図書館出版社、2018）、李華が習禅仲間たる吉原の頼みを受け撰した『吉光墓誌』がある。墓主自身が敬虔な修禅者であり、撰述者も禅または仏教の信者である。この種の相互関係がその時代の修禅に励んだ在家信者間の精神的交流の形である。

最後に、初期禅の両都における社会的な伝播を考察する際に、またこの時代の最も重要な歴史的事件である安史の乱に触れる必要がある。急劇な変化や、危険な社会状況において、彼らの対処法はどのようであったか。禅僧だけでなく、修禅の在家居士の対応も研究する価値がある。吉光は安史の乱の際に反乱軍に協力せず、山野に隠居した文人である。李華が彼に撰した墓誌では、大燕をもって国号にし、聖武紀年の年号を使っている。彼の官として経歴に関する言及も皆無で、その墓誌の題銘もただ『吉居士志銘』の五文字であり、こうした点は唐代の墓誌の中でも異色である。全文を概観すれば、李華は言葉を濁しているものの、吉光が反乱軍の統治した地域に身を置きながら、それに非協力的な態度を明らかに示していたことが窺われる。当該墓誌では、撰述者の李華が賊軍の手に堕ちた洛陽にいるため、頻繁に危険に遭っていることがわかる一方、李華が偽職に就いたことに対するいかんともしがたい心情が吐露されている。

上に例示した安史の乱の時代の禅僧・処士及び占領される地の役人たちは、ある人は戦乱を逃れて移住したり、ある人は官軍を迎え入れたり、ある人は山野に隠居したり､あるいは頻繁に偽職を務めたりした。これらの複雑な選択は、初期禅が直面した複雑な社会状況を如実に反映しているのである。

四、禅思想の頓悟説

墓誌によると、初期禅の思想の基調は、依然として「禅定」または「一行三昧」を主として、禅定より智慧を発し、煩悩内障を対治し、真如を頓悟し、解脱を得ることを目的としていた。そのスタイルについては、『法輪禅師塔銘』に「師耳目之教、塵内息塵、至身意閑、動中修静、若禅若空、示病深地、破妄有界、除涅槃土」のように記されている。具体的な修行の実態は、『郭佩墓誌』

（北京大学出版社、2012）に「毎清晨焚香、端念一室、澄停万有、彷彿諸天、凡所主持、日為準度。守之如奉法令、修之以臻定慧」と記されるようなものであったと見られる。つまり初期禅の修証のスタイルは厳粛な静坐の修行法であり、唐代後期の禅宗とはかなり異なるものである。

新出墓誌資料は、初期禅宗の禅師たちが禅と律・禅と浄・禅と教・禅と密の関係を調和させようとした努力を示し、また唐代両都における多様化した仏教思想を背景として初期禅が自らの理論の構築を試みたことも反映している。この点について、発表者は初期禅思想における頓悟説を中心として考察いきたい。

頓悟説を主張する墓誌類石刻文献については、学界にすでに周知され、激しく議論された『候莫陳寿塔銘』（北京大学出版社、2012）以外にも、頓悟の概念または頓悟に関する他の表現が数多く見られる墓誌が一定数存在すると筆者は見ている。新出の初期禅に関わる墓誌では、頓悟を記した内容はほとんど初期禅宗の禅師、即ち神秀、義福、普寂、降魔蔵が学人の指導にもちいたものであり、神会派の禅師によるものについては確認できない。『候莫陳寿塔銘』と初期禅に関わる新出墓誌とを合わせて検討した結果、発表者は初期禅の頓悟思想が唐代両都における伝播の過程で形成され、初期禅宗の禅師たち、即ち神秀及びその弟子義福・普寂・降魔蔵が両都に伝えた主要な教えであると考えるに至った。例えば、741年成立の『真如海墓誌』（上海古籍出版社、2017）と758年成立の『法振律師墓誌』とに頓悟に関する記載が見られるが、ことに後者では義福が「頓悟門」を教授したことを記している。

敦煌禅宗文献『頓悟大乗正理決』には摩訶衍の「頓門」の教説が義福と降魔蔵に由来すると記されるが、その正当性はこれら新出墓誌によって証明されたといえよう。上述の墓誌によれば、その他の禅門の弟子も義福と降魔蔵に「頓悟」の思想を学んだと記されている。これらの記述を総合すると、神秀･義福･普寂・降魔蔵などの禅師はみな「頓悟」思想を教えていたことになり、敦煌文献の記述を裏付けるものとなる。

初期禅における頓悟説を研究するにあたり、我々はまず敦煌禅宗文献に見られる神会により造られた虚構から脱却すべきである。現段階で確認し得る敦煌文献と墓誌石刻文献によれば、実際には頓悟を主張するかどうかは禅宗の分派の思想的な基準にはならないと考えられる。仮に頓悟思想の起源を論じるなら、慧能や神会よりも、神秀と彼の門弟のほうが明らかにより多くの「特許権」を有するのではないだろうか。またこの点について、程正氏は敦煌文献の中には、

神秀及び彼の弟子たちの頓悟の教えが表れており、初期禅思想の構造の研究はさらに進展させる必要があると指摘する。したがって、神会や燈史の影響に左右されることなく、初期禅思想の様相を改めて検討する必要がある。

五、「禅宗」と「祖」の用例

禅宗という宗派の名は、南北朝時代から初唐までには出現しない。よって伝世文献中の「禅宗」の最古の用例は、中唐から五代までの時期に下ると考えられる。これは柳田聖山氏が『初期禅宗史書の研究』の中にすでに示された見解である。敦煌文献P.4646に連写された三番目の文献、即ち成立年代の上限を建中元年（780）と推定し得る『頓悟大乗正理決』の序文には、降魔蔵と義福より禅を習った摩訶衍と、チベットで活躍したインド僧蓮花戒との「頓・漸」に基づく論争に関する記載がある。柳田氏は、この中に見られる摩訶衍と王錫が発した「禅宗」という立場の表明が、文献中で最も早い用例であり、またこれも両都の仏教界に則した慣例であったと考えている。

近年、石井公成氏は敦煌文献の中にさらに早い時期の用例があることを指摘した。この指摘に基づくと、「禅宗」を宗派名とする用例の出現時期を少なくとも31年、つまり天宝八載（749）以前まで早めることになる。石井氏は『敦煌願文集』（黄征・吴偉校註）の「亡考妣文範本等」を読み、賢者（居士）による討論の一文である「処棄煩悩、頓証如来之教、理応久居人代、遍告行以修真、闡化禅宗、作唱導之初首」に禅宗の用例を発見している。

墓誌中の「禅宗」の用例は、管見の限り、更に数箇所が確認される。例えば、751年成立の『孫四娘墓誌』（国家図書館出版社、2015）には墓主が「早悟禅宗」と記され、754年成立の『広智墓誌』（国家図書館出版社、2020）には墓主が「早襲禅宗」と記される通りである。

宗派名としての「禅宗」の用例は、敦煌文献では天宝八載（749）が上限とされ、墓誌石刻文献では天宝十載（751）または天宝十三載（754）が上限である。これらの文献資料は、初期禅の唐代の両都における伝播において、一部の禅師たちがすでに宗派の構築に努めていたことを表している。彼らは「禅門」・「東山法門」などの伝統的な名称以外に、より自派に適した包括的・画一的な名称を追究しようとした。「禅宗」という新たな名称は徐々に使われるようになり、その後人々に受け入れられるようになった。しかしながら初期禅の段階では、全ての修禅者たちが、自分自身が禅宗の一員であるという共通認識はまだ得ら

れていなかった。

新出墓誌のもう一つ注目に値する点は「六祖」の用例である。『大唐故長安尉王府君盧夫人墓誌銘並序』（国家図書館出版社、2018）には「東山六祖、茲道不替」という句が見られる。この記述は、禅宗の「六祖」という呼称を用い始めた年代に関する学界の通説を正すことができる。管見の限り、禅宗史上で「六祖」への言及はこれが初出である（735）。これによれば、あるいは神秀自身は「口不自称為第六代数」であったかもしれないが、少なくとも神会が滑台の宗論を行った頃には神秀が「東山六祖」と認められていたことを意味しよう。

「禅宗」と「祖」という宗派意識の性質をもった言葉の出現は、初期禅において「禅宗宗派意識」がすでに確立した状態であったことを明らかに示している。もし、初期禅の歴史的発展が断たれなかったならば、おそらく中国各地の修禅者たちはこの統一的な「禅宗」という名称、そして統一的な系譜のもとに、発展していたであろう。しかし、周知の通り、現実は決してそうとはならなかった。

（和訳：大村雄也・兪暉）

※本論は蒋海怒氏により2022年度駒澤大学仏教学会第 2 回定例研究会にて用いられた本誌「新出墓誌所見初期禪兩都流播考」要約版の和訳である。

〈キーワード〉禪宗・初期禪・兩都・墓誌・頓悟